

# 日本記者クラブ会報

第421号  
2005年  
(平成17年)  
3月10日発行

〒一〇〇一〇〇一  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
◎社団法人 日本記者クラブ

## 山古志・長島村長会見

### 「お礼のため寄せてもらいました」

出席者がゲストの話や人柄に共感し、感動したという点で、山古志・長島忠美村長の会見（2・4）は特記されるべきだろう。この村も平成の大合併で、4月には長岡市に組み入れられることが決まっている。長島さんは最後の村長さんだ。

この会見は、新潟日報の渡辺隆会員（東京支社報道部長）に間に入ってもらい、クラブから招待状を届け実現した。来日する国・公賓の公式会見を主催することを主目的に設立されたクラブだが、こういう利用のされ方もうれしいことだし、有意義だと思ふ。

長島村長は、全国の人々から寄せられた大きな支援に対して謝意を表明するため、クラブの招きに応じ会見をした。全村避難を決めて以来、自分の気持ちをゆるめないために、



1階ホールで写真展を見る村長 1968年豪雪の山古志で新聞を配る老人を 高橋義雄氏が撮影したもの

着用しつづけているという紺の防災服姿の村長は、冒頭、このように話した。「もともと、このようなどころでお話できる人間ではないのですが、大きな支援をいただいたみなさまに、お礼を申しあげたくて、今日

は寄せてもらいました」。

昨今はメディアへの注文や批判が日常化し、ことのほか厳しくなっているが、この日はやはり事情が一変した感じだった。「適切に報道していただきました」と、村長は無条件でメディアの対応にも感謝した。

事態が事態ということもあるが、メディア側の人間も人の子なので、ニュースソース側の対応や反応に全く影響されないとはいえないだろう。「適切であった」のには、村長の資質や考え方も関係していただろう。もつといえ、今回の地震で大被害を受けた豪雪・中山間地の山古志・共同体で培われてきた揺るぎない大事ななか、報道陣にも影響を与えたのではないだろうか。

都会で暮らす人間とは、視野に入れる時間の長さが決定的に違う。村長が語ったように、この集落の人々は厳しい生活条件の中で、自分たちの代には実益が期待できなくとも、子や孫の時代のことを考え、協同して難題に取り組んでき

た。その精神で、あそこへ帰り、復興を果たしたいという。現実には兼業農家の人もいろいろいるので、むずかしい局面も出てくるだろうが、このリーダーなら克服してくれるだろう。この会見に出席した人はみな、そう思いそう願ったのではないだろうか。

### インド取材団

#### 3月6日に出発

クラブでは毎年「アジア取材団」を派遣している。今年度は中国を追求するように躍進めざましいインドを訪問する。一行15人が3月6日、インド航空で成田を発った

団長は毎日新聞の論説委員長（役員待遇）・菊池哲郎さんをお願いした。副団長は4人で、朝日の西井泰之・編集委員、読売の杉山美邦・論説委員、日経の太田泰彦・編集委員兼論説委員、共同の細田昌夫・経済部次長。地方紙からは道新、中日、山陽、高知が、テレビはNHK、テレビ東京が参加してくれた。産経は経済部とビジネスアイから計2名を派遣してくれた。

デリーでシン首相など要人と会見した後、バンガロール、コルカタでソフト開発会社や進出企業などを取材し、3月17日帰国する。

（専務理事 岩崎玄道）

長島 忠美 新潟県山古志村村長

2・4(金) 記者会見  
司会 芋原一善委員 出席 58人

▼試練は必ず乗り越えられる



新潟 県中越 地震で 全村民 が村外 へ避難 して3 カ月余 り。 「3・

8メートルの積雪を記録し、村に残した家の雪下ろしと、仮設住宅の雪下ろしで住民は疲れ切っている」と被災地で冬を越す苦勞を切々と語った。

地震直後の村で「山が動いた」の目を当たりにし「自分の無力さを感じた」と話す。道路が寸断され、通信も途絶えた。「どんな状態でも(自治体の)外に(情報を)発信できる態勢を整えなくては」と全国の自治体に警鐘を鳴らす。

「いつごろ、どんな形で帰れるのか、春には(村民の心に)希望の灯をともしたい」と復興計画策定がヤマ場を迎えていることを強調。「お

世話になった全国の皆さんにおいでいただけるような村に必ずして、村でお礼を言いたい」とも。

4月には長岡市と合併し、自治体としての山古志村は消える。「今までは目に見えるところに人(村長や職員)がいた。これからはそっち(山古志村出身者)ばかりを見ていられない人がトップになる」と、村民の間に不安の声があることを認める。

村長の任も3月末で終える。「その日まで、この服を脱がない」と、会見でも紺の防災服姿。その後も「個人として、NPOを立ち上げてでも災害にかかわっていかうと思ってる」と、自らが背負う運命の重さを感じさせた。

自らは避難前、無農薬農業にこだわり、自分で食べるコメも卵も作る生活。妻が栽培した野菜が東京・六本木のレストランでパスタの具になっていることに話が及ぶと、表情がほころんだ。

「試練は必ず乗り越えられる」、厳しい認識の中にも、樂觀を忘れない。2200村民をまとめているのは、そんな人柄かもしれない。

共同通信社会部 神田 英彦

伊藤 憲一 日本国際フォーラム理事長  
田中 明彦 東大教授

2・14(月) 研究会「東アジア共同体」①  
司会 小池洋次委員 出席 山人

▼明確なアジア外交戦略を

ようやく一歩は踏み出した。だが、どういうルートをたどって山頂を目指すのか。肝心の山頂はかすみ、形さえもよく見えない。

東南アジア諸国連合(ASEAN)と日中韓の「東アジア首脳会議」の年内開催が決まった。域内諸国が共榮する「東アジア共同体」実現に向けた一歩といえようが、その枠組みや中身を詰めるのはこれからだ。

ゴールに据えた「共同体」のとなりえ方は国によって異なる。経済水準や政治体制が違い、宗教、文化も多様なこの地域が欧州連合(EU)のような共同体になるのは至難だ。

何より中国や米国との関係をどうとるのか、難しい選択を迫られる。ASEANの

ASEANの



間でも米中に対する距離感はずいぶんまだ。

研究会では共同体づくりについて、伊藤憲一・日本国際フォーラム理事長(写真右)は「私は推進6分、慎重4分。こんなものに日本が乗ってよいのかとも思う」として、地域の動きを正確に把握した上で対応を見極める必要性を指摘。これに対し、田中明彦・東大教授(同左)は「より望ましい枠組みをつくるつもりなら、日本が積極的に発言すべき」と前向きで、2人の姿勢は対照的だった。

2人の発言は東アジア共同体をめぐる意義、可能性、難しさを象徴しているようで興味深い。

「自身の戦略は？」終盤に新聞OB氏が2人に切り込んだ。その矛先はむしろ国の在り方に向けられている。

要は日本としての明確なアジア外交戦略を持って、どう主体的に共同体づくりに関与できるかだ。ここでもまた日本外交が試される。

西日本新聞論説委員(東京駐在) 玉井 行人

尾身 茂 WHO西太平洋地域事務局長

2・16(水) 研究会「感染症とアジアの危機」  
司会 宮田一雄委員 出席 51人

▼健康と文明く鳥インフルエンザ



天然痘を根絶し、ポリオも克服しつつある人類がい

ま、新たな感染症の驚異にさらされている。新型インフルエンザだ。もともとは鳥に感染するウイルスが、東南アジアの国々で人間に感染し始めている。ウイルスの遺伝子がわずかな突然変異を起こすだけで、免疫を持たない人間社会に爆発的に広がり、日本でも10万人以上が死亡する可能性がある。

一方で、現実には急増している「死」がある。自殺だ。日本での死者は5年間で5割増えた。自殺が多いのは日本だけではないらしい。地上の楽園と呼ばれた南太平洋の国でも社会問題となり、医療や心理学、文化人類学の専門家が原因を議論したところ「関係性の欠如 (Lack of Connectedness)」に行き着いたと

いう。

人類は生活を豊かにするため、家禽を大規模に飼育し、自然を開発した。異種の動物と接触する機会が増え、人獣共通感染症という新たな感染症のリスクが増した。一方、人間同士の「接触」はといえば、家庭や地域、職場で、結びつきは急速に希薄になりつつある。

そこで、尾身氏は2つの提案をする。人間社会では、新しい関係性を構築する。高齢者、学者、NGOなどでコンフォラムを設立し、市民の社会貢献への意欲をくみ上げる。感染症に対しては、他の動物種とのすみ分けを徹底し、国際協力を強化する。感染者の隔離に伴う個人と社会の権利の相克など難問は多い。アジアにおける日本の役割はいつそう重要という。

マニラに赴任したのは90年。「以来、外からみていると、最近の日本はどうも内向きで、存在感が薄くなっているように感じる」。心配の種はつきない。

朝日新聞科学医療部

嘉幡 久敬

マイケル・ソマレ パプアニューギニア首相

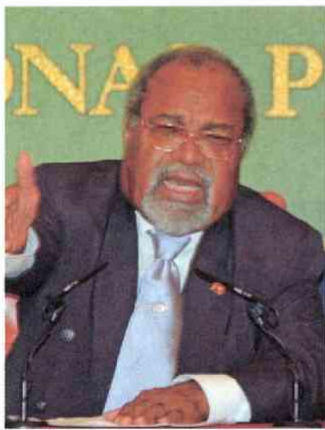
2・16(水) 記者会見 司会 小池洋次委員  
通訳 長井暢子 出席 38人

▼新たな発展的関係を期待

京都議定書が発効した2月16日。太平洋に浮かぶ島国パプアニューギニア(以下PNG)のソマレ首相は「我々太平洋の島国の住民は地球温暖化の被害者」だと言いつつ、

およそ4万キロに及ぶ海岸線を抱えるPNGは今年建国30年。この若い国を襲う地球温暖化はもはや国民全員に突きつけられた危機にほかならない。私たちが今後PNGとの発展的関係を考える場合、この温暖化の問題を常に念頭に置いて議論することが最低限必要だろう。

ソマレ首相は日本をはじめ先進国との関係が「強化された連携を通しての協力」であることを指摘した。重要なのは、国内に埋蔵する資源と



一次産品を諸外国に十分に活用してもらい、その活用こそが自国民の発展につながるということである。

PNGにとって日本はすでに第2の貿易相手国である。今後も日本からの継続的な投資をとりつけ、鉱山や石油資源の開発を安定的に進めた、というのが本音であり、一方で、海や山を利用した観光開発や魅力ある果樹栽培など農産品の輸出の拡大にも力を入れたいという。ただしPNGがこの分野で発展を期待するならば、他の太平洋諸国と差別化された事業や、農産品の安定的な供給と価格がどこまで確保できるかに注目すべきだろう。

戦後60年を迎える日本の人々にも期待を語った。過去の一方的関係にとどまることなく、さまざまな世代の人に、そしてより広い分野の人たちにPNGとの交流をしてもらいたいと述べた。

PNGの将来に、日本がどこまで関心を持って協力関係を築けるのか、日本に期待される使命と役割を今後とも注視していきたい。

NHK国際放送局

海老原 淳

第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議組織委員会  
岸本忠三・会長 樽井正義・事務局次長

2・17(木) 研究会、HIV/エイズ(20)  
司会 宮田一雄委員 出席 39人

▼神戸・エイズ国際会議の意義

エイズが「現代の黒死病(ペスト)」と恐れられたのは、たかだか20年前。いまだ根治はできないまでも、その後、各種新薬の開発で、かなりコントロールできるようになってきた。このためか、国内ではまるで「過去の病気」のように社会的関心も薄らぎつつある。

しかし、今や全世界のHIV感染者は4000万人、年間死者300万人。「病気で死ぬにしても、がんは中高年が大半。しかしエイズは若者や子どもといった生殖年齢前の世代を襲う人類史上大きな問題」と免疫学者の岸本氏(写真右)。サハラ以南のアフリカでは、国家存亡の危機に陥っている国もある。近年の国際的視点は世界人口の6割を抱えたアジアへの流行をいかに抑えるかに移っている。



第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議は7月1日～5日、神戸国際会議場などで、参加希望は<http://www.icaapt.jp/jpn/sankahm.htm>。問い合わせは会議事務局 06-6367-2188。

「アジアではエイズで年間100万人が死亡しており、インド洋の巨大津波が年に5つ襲来しているのと同じ。患者の90%は途上国にいて、治療が受けられるのは先進国のみ」と倫理学者の樽井氏(同左)はエイズにおける南北問題の要素を指摘する。実際、東アジアの感染者数は過去2年間に2・5倍に急増。とりわけ中国では2010年までに1000万人に達するとの推計も出されている。会議はエイズ関連の学会に止まらず行政、国際機関、NGO、NPO、企業など60カ国から3000人が結集して、タイトルに掲げた「科学とコミュニティの英知の結合」を目指す。先進国で唯一、感染の歯止めがかからないニッポンで、国民の関心を高めるメディアの使命も問われている。読売新聞医療情報部長

前野 一雄

ワンガリ・マータイ  
ノーベル平和賞受賞者 ケニア副環境相

2・21(月) 記者会見 司会 中井良則委員  
通訳 池田薫 出席 91人



▼「もったいない」の精神

単なる環境保護運動ではなく、植林を通じて貧しい人々の社会参加意識を高め、女性の地位向上を含む祖国ケニアの民主化につなげたい。その思いで非政府組織(NGO)の「グリーンベルト運動」を創設してから4半世紀以上。独裁政権による弾圧や投獄にもめげず、ついに昨年、ノーベル平和賞を受賞したと聞けば、「闘士然」たる風貌、語り口を想像するだろう。ところが、その「素顔」は実にソフトだった。「京都の清水寺を訪れたが、自然の美しさをめぐるこの大切な話をあらためて思い起こした」と笑顔で話し、その日本でも森林政策の問題からクマの出没が相次いだ

と聞くと、「ケニアでも生息地の森が破壊され、ゾウが村に出てきてしまふ」と身振り手振りを交えて熱心に説明した。世界最大の二酸化炭素排出国・米国の京都議定書を批准していないことに話を向けられても、「こうした国でも、個人のレベルで(環境保護を)やっている人がいる」と直接的な米国民批判にはくみせず、「その国だけに目を向けられないように」と諭すように語った。

そのマータイさんが目下、一番気に入っている言葉が日本語の「もったいない」だという。日本には環境を大切にすることにつながる「もったいない」の精神が文化に根付いている」と称賛し、「世界に向けたメッセージにしたい」と付け加えた。この言葉は日本滞在中に覚えたようで、会見中にも繰り返し使用。お気に入りのほどがうかがえた。日本発の「もったいない」の精神が「家庭でも職場でもどこでもできる」環境保護の「英知」として、マータイさんを通じて世界に広がることを期待したい。時事通信外信部 岸本 邦彦

クルシード・マフムード・カスリ

2・23(水) 記者会見 司会 春名啓男委員  
通訳 西村好美 出席 38人



▼「核技術」流出に質問集中

「今やわが国の核は完全な文民統制下にある」。昂然と顔を上げ、核管理の安全性を懸念する質問を一蹴した外相を見て、パキスタンという国がこの数年で果たした国際的地位向上の跡を見る思いがした。

1998年の核実験、99年の軍事政権樹立と続いた同国の政治は、当然のように国際社会の批判を浴びた。冷戦下では旧ソ連の南下を阻む橋頭保として、パキスタンを水面下で支援してきた米国も、手のひらを返した。主要国の制裁下で経済面でも行き詰まりが表面化。同国の国際的な地位は退潮を余儀なくされた。

2001年9月。米同時テロ事件が、起死回生の転機となった。ブッ

パキスタン外相

シユ米大統領の「対テロ戦争」への支持をいち早く打ち出したパキスタンは「核を持つ軍政国家」から一転して称賛の的となり、国際援助の復活で、経済も一気に好転局面に入った。翌年10月実施の総選挙後に、まがりなりにも民選政府を發足させるに及んで、ほぼ完全に国際社会の枠組みに復帰したのである。民政復帰と同時に現職に就いた外相の言葉に、意気消沈したひとりのパキスタンをうかがわせる影は微塵もなかった。

しかし、核保有国であること、軍部出身であるムシャラフ大統領への権力集中など同国がお幾つかの問題点をはらむことを想起せずにはいられない。外相は、かつて自国の核技術が北朝鮮に漏えいした事実を認めながらも、国際機関による関係者への尋問をあらためて拒絶。「今はNPT(核拡散防止条約)に署名する意図はない」とも断言した。「日本はパキスタンの友人」なのだという。「友人」日本としてはまだ、パキスタンの行く手を手放しで楽観するわけにはいかないようだ。

日本経済新聞アジア部 吉野 蔵一

谷内 正太郎 外務事務次官

2・23(水) 昼食会 司会 岡元隆治理事  
村松泰雄委員 出席 10人



▼凜とした外交目指す

明快な外交哲学と論理を持った外交官である。

「凜とした志のある外交を目指したい」と基本姿勢を披歴。そのためには「国家の座標軸をきちんと設定して外交を行う」と述べながら、座標軸の設定とは国益の追求であり、国益とは安全保障であり、国家の究極的な存在理由は安全保障であると、数学の命題を帰納法的論証で解くような論理を展開した。

ロサンゼルス総領事時代に、ロサンゼルス・タイムズが谷内氏を特集記事で取り上げ「官僚的でない誠実な人物」と称賛したことがある。同僚に聞いたら「外交官らしからぬざつくばらんな人柄」と同じような答えが返ってきた。

イラクの政治プロセスについて、「イラクのイラク化」を進める立場から日本の支援を強調、「歯をくいしばっても支援を進める」と情緒的な言葉も飛び出した。

対北朝鮮政策の基本方針では「対話と圧力」を掲げ、「したたかに、しかし、しなやかに」と、制裁論とは一線を画す姿勢をあらためて示した。同時に経済制裁はいろいろな方法があると述べ、制裁派への配慮もにじませた。

官房副長官補を務めたことから、官邸の信任も厚い。「外交と内政の一体化」という持論を聞いたとき、外交を「内政と外政のアンサンブル」として、近代欧州の外交舞台でら腕を振るったフランスの外交家タレイランを思い出した。

国際社会は相変わらず戦争やテロに脅かされており、外交の重要性は高まるばかりだ。日本の国際貢献のために、谷内氏には国際政治の現実を冷静に分析し、「凜とした外交」を推進するようお願いしたい。

共同通信論説副委員長

横山 立

中村 秀一 厚労省老健局長

2・25(金) 研究会 社会保障改革② 介護保険  
司会 飯野奈津子委員 出席 57人

▼介護保険は改革の「先兵」

介護保険が2000年に実施されて以来、初の大規模見直しになる法案が国会に提出された。そのとりまめめ責任者だ。25年までは日本の高齢化の「最後の急な上り坂」だ。団塊の世代が大量に引退し、高齢者数は現在の1・5倍の3500万人に急増する。改正の主眼は給付の伸びの抑制に置かれた。

介護予防の強化や特別養護老人ホームなどの施設の食費や居住費の自己負担化は重要な柱だ。認知症や一人になっても住み慣れた地域で暮らせるよう、夜間対応の訪問介護や小規模施設なども創設される。

当日は、新島良夫審議官が制度改正を説明。国会答弁のため1時間遅れで登壇した中村局長は、政府が「06年度内を目途に結論を得る」と



した社会保障の一体見直しについて会場から問われ、「今回の介護保険改革が、次の医療保険改革につながる」と持論を展開した。経済団体などは厚生年金の保険料率は15%が限界だと主張するが「公的年金として破滅する。家計をトータルで見ればいい」と考えるからだ。

厚労省は、介護保険を「社会保障のフロントランナー」と呼ぶ。介護サービスの1割の自己負担化は、医療での高齢者の1割負担の「先兵」となった。介護施設の食費などの自己負担化は病院でも導入されるのか。局長は「医療機関での長期入院の人と、介護施設の入所者とのバランスをどうするのかと(矛盾を)突ける」と、今後の戦略を示唆した。

さらに、欧米では、がん患者を中心に自宅で最期を迎える人が増えている例も示し「介護が必要になっても地域で暮らせる介護モデルは医療でも使える」と指摘。「実現すれば医療の無駄な部分を抑制する余地が出てくる」との見通しを示した。

朝日新聞生活部

寺崎 省子

与謝野 馨 自民党政調会長

2・28(月) 記者会見 司会 和田圭委員  
出席 112人

▼郵政民営化は一歩ずつ



郵政民営化をめぐる政府と自民党の調整が本格化するなか、党側の調整役を務める与謝野政調会長の登場とあって、会場は現役の政調会長番からOBはもちろん、テレビカメラも多数つめかけ、関心の高さを反映した記者会見となった。

ところが、焦点の郵政民営化問題について与謝野氏は会見の冒頭で「郵政民営化の話は現在進行形で、いろいろ結論を出すかということを含めて一歩ずつ進むしかない」とだけ述べ、話題を財政再建や憲法改正問題など今後の課題に移してしまった。

ただ後半の質疑応答では会場から「民営化後は郵貯の運用先が変わって国債が消化できなくなるのではな

いかに」「民営化後は窓口で国民に直

接、国債を販売してはどうか」など、郵政民営化に関する質問や提言が相次いだ。これに対し与謝野氏は「国債をある程度持つていないと運用先がない」と述べ、国債の消化は可能との楽観的な見方を示した。また国債の窓口販売については「悪い話ではない」としながらも、国債発行を抑える財政再建の重要性を強調した。さらに郵政民営化法案とりまめの時期については、政府が当初予定していた3月中旬の国会提出は困難との見通しをにじませた。

ところで郵政民営化に関する質疑の中で「自民党きっての政策通」である与謝野氏にしては、やや心もとない場面もあった。郵政民営化後の郵貯の運用について与謝野氏は「あんな大きなものをどうやって始末するのか、本当に誰も考えていない」というところが今回の心配の種だ」とため息まじりに語り、郵貯の運用に懸念を示した。今ごろそんなことを言われても困るのだが、この点も今後の政府と自民党の議論を注目していく必要があるようだ。

フジテレビ報道局解説委員

和田 圭

立山 良司 防衛大学教授

▼中東和平への好機



中東 和平の推進に向けた好機が訪れつつある。そんな期待が高まつ

ている。 第1に、アラファト氏の死去を受け、選挙によって後任に選出されたアッバス・パレスチナ自治政府議長の頑張りが挙げられる。立山氏は「アラファト氏の残した問題の総決算に挑み、真摯に指導力を発揮している」と評価した。

第2に、これまでとは打って変わって「ハト派」の態度を保つシャロン・イスラエル首相の姿勢だ。立山氏は「本当に変わったのか、変わったふりをしているだけか、真相は分からない」としながらも、「安全保障上、得策とみているのだろう」と解説した。

2月28日 研究会 中東ベシタ②パレスチナ 司会 中井良則委員 出席 73人

第3に挙げられるのが、2期目に入ったブッシュ米大統領の中東和平への積極姿勢だ。

確かに「これまで何度も期待しながら裏切られ続けてきた」と立山氏が嘆息したように、問題は山積している。パレスチナ、イスラエル、米国などの動向が微妙に変化するだけで、バランスを失ってしまう。いわば「砂上の楼閣」のようなものだ。

しかしそれでも、「イスラエルの60%から70%の人々がパレスチナとの共存を目指すべきだと世論調査に回答し、パレスチナ側にもまた、イスラエルと対立しても仕方がない」という議論がはじまっている」と、立山氏は指摘した。この10数年間で、一般の人々の意識は確実に変化してきているのである。

自爆テロと報復。そういった暴力の応酬に、我々メディアは眼を奪われがちなのだが、「一見静かに見えるときほど、水面下で重要な動きがある」との立山氏の言葉を、中東情勢の報道に携わる一人として、あらためてかみしめたい。

毎日新聞外信部

高橋 宗男

マイBOOK マイPR

検証 日本の組織ジャーナリズム—NHKと朝日新聞

川崎泰資 (NHK出身)

柴田鉄治 (朝日新聞出身) 共著

副題に「NHKと朝日新聞」とあり、刊行と同時に両社が大喧嘩を始めたのには驚いた。周回は「二大メディアの激突」とかいつて面白がっているが、問題の本質がそんなところにはないことは、本書を読んでもらえばよく分かるはずである。本書の目的は、ジャーナリズム精神の衰退が最も著しいのがテレビや新聞であり、それは「組織」が志を圧殺しはじめたからではないかという問題意識をもとに、著者それぞれの出身母体に檄を飛ばしたものだ。(柴田)

(岩波書店 2310円)

恐竜の道を辿る労働組合

早房長治 (朝日新聞出身)

2003年、労働組合の組織率は20%を割り込んだ。大部分の労組が専従の削減を迫られ、活動は不活発化し、無力感が組合員の間に広がっている。もし、組織率が15%を割つ

たら、労働組合は恐竜の道を辿り、事実上、この世から姿を消してしまうだろう。危機感を募らせた連合は、外部委員による評価委員会を発足させ、改革のための提案をまとめた。本書では、評価委での討論を紹介しながら、再生の道を探した。ポイントは、企業別組合の限界の突破である。(緑風出版 1890円)

図説・ヨーロッパの王朝

加藤雅彦 (NHK出身)

20世紀の初め欧州諸国のほとんどは君主制下にあった。由緒ある王朝が続々姿を消した今では共和制が大勢となったが、王制時代の遺産は正負さまざまな形で引き継がれている。ソ連崩壊後のロシアでは、ロマノフ家の双頭の鷲が国章として甦った。「百年戦争」以来フランスは「不実のアルピオン」(英国)への不信を深め、その影響は欧州統合の現代にまでおよぶ。女王・女帝を認めた英露。かたやサリカ法典によりこれを排除した仏独。間接的ながら皇室も視野に入れた欧州王朝史です。(河出書房新社 1890円)

## 「非核2・5原則」だった ——冷戦時代のオフレコ発言——

野上 浩太郎



これは「聞いたけれど書けなかった話」である。

ときどきあるケースで、「これだけは書いてもらっちゃ困るし、しゃべられても困る。もし書いたりしゃべったりするのなら、私は言わない」とあらかじめ相手から言われる。記者を職業としている人なら「分かった。絶対に書いたりしゃべったりしないから、言ってくれ」と言うに決まっている。

私もそうだった。いまから20年近く前の話だ。話の中身を聞いて、さすがの私も「これは書けないなあ」と思った。けれども、今回、多くの読者のいるこの欄に書くのだから、ついに約束を破ることになる。

理由は、国際情勢がその後大きく変わり、むしろ多くの人々にこの話を知ってもらったほうがよい、と判

断するに至ったからである。

「なあんだ。そんなことをもったいぶって書くな」と思う人は、途中で読むのを止めていただきたい。

話題は、新しく閣僚になった人物に対する官僚たちのレクチャーである。その中身は日本への核兵器の「持ち込み」問題だ。以下、私に語った相手の発言内容に沿って箇条書きする。

一、新しく外務大臣になった人には、冒頭必ず「特別のレクチャー」をする。そのテーマは日本への核兵器の「持ち込み」に関することである。

一、国是として非核3原則があるのはご承知の通りだ。「(核を)作らず、持たず、持ち込ませず」である。このうち厄介なのが「持ち込ませず」で、実は米空母や艦船が核兵器を積

んだまま日本の港にいったん入って短期間で出港しても「持ち込みには該当しない(従って禁止されない)」ことを、日米両国政府間で秘密裏に約束している。

一、この約束は厳重秘密扱いとなっており、新外務大臣は決して口に出さないでいただきたい。

つまり、新しい外相は就任早々、外務官僚から、国民に「うそ」をついてください、と要請—確約させられるわけだ。

これを聞いた瞬間、私は一瞬、呆然とし、相手が自分をからかっているのではないか、と思った。だが、長い付き合いのあるこの相手は、こんなときに私にうそをついてからかうような人柄ではない。題材からいっても、記者をからかうような性質のものではないだろう。

この発言の中身をいまさら「解説」するのも気が引けるが、最低限の背景説明は必要だろう。

つまり、これは当時から論議と疑惑の対象になっていた「非核3原則」が、実は「2・5原則」であり、歴代外相はそのことを就任時に頭にたたき込まれることを意味している。

「持ち込ませず」の中には2種類ある。米軍基地の一部である港湾の倉庫などに長時間、保管するための「持ち込み」と、入港した米空母などがすぐ持ち去る短期間の「持ち込み」である。日米両国政府は前者が「持ち込み」であり、禁止の対象となるが、後者は「持ち込み」には該当しないと解釈し、この解釈を厳重秘密扱いの密約にした。

恐らく日米2カ国語で書かれた密約の中身は、英語で言うところ、後者の「導入」が「introduction」、前者の「保管」が「storage」、らしい。私がこの話を聞く直前に、ライシャワー元駐日米大使が毎日新聞のインタビューで、この区別を明らかにしたように記憶する。

これを外相が交代するたびにべらべらしゃべられては大変だから、極秘事項とし、就任時のレクチャーの冒頭、特に念を押して頭にたたき込んでいただく—というわけだ。



今では核の持ち込みか、そうではないかは、大きな安全保障上の課題ではなくなった。やはり米ソ冷戦体制が崩壊し、超大国が大量の核兵器で対峙する状況が消滅するという、国際情勢の変化が大きい。

非核3原則であろうと2・5原則であろうと、それが政治や外交を揺さぶるような事態ではなくなった。

それでも、冒頭のやりとりは冷戦崩壊よりも約10年前、まだまだ非核3(2・5)原則がホットでびりびりしたテーマだった時期のことである。



そんな時期に完全オフレコとはいえ、よくぞ大胆な暴露をしたものだと思う。この時期、ライシャワー発言が飛び出し、その数年前には米海軍のラロック元提督が米議会の秘密公聴会でこれまた大胆な発言をしたばかりだった。

ラロック提督は「日本に入港する際、艦載機に装着した核兵器をどこかの島に積み下ろして、それから入港したことなど一度もない」と正直に証言した。

1974年秋、田中角栄内閣の末期である。当時のワシントン特派員のS氏が、電話帳のように分厚い秘密公聴会議事録を読み通し、証言の

この部分を発見したのである。

その時期、私は共同通信の首相官邸クラブのサブ・キャップだった。外務省出身の長官秘書官に特別にお願いで長官室にもぐり込み「ラロック証言」に対する日本政府の反応を聞いた。

「君は俺に何を言わせたいんだ!」これが二階堂進官房長官の反応だった。どう答えればいいのか、二階堂さんには分からなかったらしい。

そこで、外務省出身秘書官が本省と協議の上、編み出したのが「ラロック氏はいまや海軍を引退した民間人だ。民間人の無責任な発言に、日本政府はまともに応答できない」というものである。これが内閣官房長官のコメントになった。

それから数年後。こんどはライシャワー元教授のインタビュー発言が飛び出した。鈴木善幸内閣当時で、官房長官は宮澤喜一氏、外相は園田直氏である。

教授の発言は、自分が駐日大使の時期に、大平正芳外相(当時)との間で取り交わした密約の中身だ。核持ち込みの中の「貯蔵」と「導入」の区別まで英語で述べた緻密な証言だった。

それでも日本政府・外務省は頑固で小心だった。「日米両国政府間に

は本格的な信頼関係がある」「核兵器を日本国内に持ち込む場合には米政府は必ず事前協議にかける約束である」「これまで一度も核持ち込みの事前協議を言い出したことはなく、従って日本政府は持ち込みがなかったと確信する」。

国会や記者会見で何を聞かれても政府答弁はすべてこれだった。

唯一の例外は園田外相が、野党の追及にたまりかねて「あんまり追及するとヤブヘビですよ」と答えた珍答弁だけだった。あまりしつこく3原則の破綻を突つくと2・5原則にされてしまうよ、という意味わしかった。

ところでこの時期、1976年秋から3年間、私は共同通信のワシントン特派員をしていた。某紙が、横須賀に入港する米空母が核兵器を搭載している、とのスクープ記事を大々的に報じた。

私が追いかけて取材を始めようとした矢先、駐米日本大使館の参事官氏から「国務省のジャパンドesk(日本部)に、この記事についてのコメントがあるらしいよ」との電話。米国の核問題について、日本の外交官がコメントの有無を真っ先に知らせ

てくるのもいささか変ではある。

だが米政府コメントの中身は、日本政府のいつもの答弁と同じだった。「核兵器を持ち込もうとする場合は、必ず事前協議にかけるというのが日米両国政府間の約束である」「今回も米政府が、日本側に事前協議を提案した事実はない」「米政府は一連の日米間の合意や取り決めに忠実に順守する」。

私はこの参事官氏が事前に国務省に出向いたこともキャッチしていた。米政府のために、この人がコメントを書いたのだな、と私はにらんでいる。

ちょうどこのあと、帰国した私は、新外相に密約漏洩を禁じる外務官僚の特別レクチャーのことを聞いたのである。今でもあの発言そのものがウソかもしれない、との思いががさめる。だが発言者の度胸満点の性格を思うと、やっぱり本当なのだな、という気がしている。

のがみ・こうたろう 1938年生まれ 62年共同通信入社 科学部政治部 外信部を経て76年から3年間ワシントン特派員 政治部長 整理部長 編集委員室長などを歴任 98年定年退社後は駒沢大学専門委員 渋谷教育学園幕張高校非常勤講師として論文指導 著書に「政治記者」(中公新書)「現代政治がわかる古典案内」(中公新書ラクレ)

## ライス長官外交デビュー

控えめな笑顔と  
強い意志▶石合 力  
(朝日新聞社)

シラク仏大統領との会談を終え「関係修復」をアピール(パリ 2.8) = 写真AP/WWP

米大統領補佐官から、アフリカ系女性として初の国務長官へ。第2期ブッシュ政権の「外交の顔」となったコンドリーザ・ライスは長官が最初の外国訪問に選んだのは欧州、中東だった。イラク戦争をめぐって亀裂の走った「米欧同盟」を修復し、任期内に中東和平実現を目指す、という政権の意気込みの表れだ。同行で間近に見た新長官の「外交デビュー」とその素顔を紹介する。

## ○強行日程

「早寝早起き、体育会系」の多い

共和党政権。学者肌のライス長官も例外ではない。毎朝5時起きで運動を欠かさない「体力派」でもある。

2月3日から10日までの8日間で訪問したのはロンドン、ベルリン、ワルシャワ、アンカラ、エルサレム、パレスチナ自治区ラマラ、ローマ、パリ、ブリュッセル、ルクセンブルクの10カ国・地域。長官専用機のメデア席は10数席しかない。ポイントを絞って民間機で追いかけ、現地でも同行組に合流した。

## ○リアリスト

ハイライトとなった中東での実質的な滞在時間は約23時間。長官は、エルサレムとヨルダン川西岸を駆け足で回った。テロ対策など実質面で協力姿勢を打ち出す一方、滞在の翌

日の2月8日にエジプトで開かれた首脳会談には出席しない「控えめな仲介」ぶりをアピールした。

理由を問われた長官は「仲介のための仲介はしない」と言い切った。仲介の「主役」を演じるよりも、当事者らの自発性を尊重し、必要な時だけ影響力を発揮する「脇役」に徹するという現実的な対応は、これまでの米中東外交とは一線を画すものだった。

ただ、イスラエルに最大限配慮するという基本線は変わらない。イスラエルのホロコースト記念館で花をささげた長官は、ラマラの自治政府内にある故アラファト議長墓の裏は素通りした。米国が「和平の障害」と見たアラファト氏は死してなお、疎んじられた形だ。

## ○政治家ライス

ライス新長官の強みは、ブッシュ大統領との太いパイプだ。欧州から個人的には尊敬されていたものの、政権内で孤立することもあったパウエル前長官との違いはそこにある。

中東訪問の後、パリで行った外交演説では、米欧同盟に「新たな一章を開く時だ」と述べ、協力関係の仕切

り直しを呼びかけた。イラク戦争で米国に反発したシラク仏大統領、シユレーダー独首相は、ともにライス長官を最大限歓迎し、「関係修復に応じる」とのシグナルを出した。ブッシュ大統領の欧州訪問の「成功」はこの時点で確実になった。

同行中、補佐官時代との違いを感じたのは、長官のさわやかな笑顔だった。ライスはこれまで政府高官として発言することが多く、表情を表に出さない「黒衣役」としてのイメージが強かった。

玄人はだしのピアノで知られる長官はパリのベルリオーズ音楽院を視察し、「政治家ライス」としての人間味もアピールした。ただ、そこでも「控えめ」ぶりは変わらない。周囲の期待をよそに、ピアノには触れず「十分練習できたら、次回にはここで演奏しましょう」と約束しただけだった。

長官が現在練習しているのは、ドボルザークのピアノ5重奏曲。欧州、中東、アジア、国連との外交ハーパーニーをどう聞かせるのか。目は離せない。

いしあい・つとむ 1988年入社  
シンントン カイロ勤務などを経て 02  
年からアメリカ総局(ワシントン)

△法人会員代表変更▽

日本放送協会

(新) 橋本 元一 会長

(旧) 海老沢勝二

■会議報告■

第259回会報委員会(2・10 シルバールーム)

3月号の編集について協議したあと、4月号からの「写真回廊」の短文

担当候補者を決定した。

出席 住田委員長、永井、中國、福沢、仙石の各委員。

第340回企画委員会(2・15 宴会場)

5月16日の総会記念講演の講師候補を決定したあと、今後のゲスト候補を協議した。また司会をした委員から行事報告が行われ、意見を交換した。  
出席 宇治委員長、村松、帆江、山田、

中井(良)、中井(康)、小池、岡田(直)、

矢島、宮田、春名、稲田、菅沼、井田、

芋原、和田、鳥居、重村の各委員。

第330回会員資格委員会(2・18 小会議室)

3月1日付の会員入退会を審査し理事会に答申した。賛助会員の資格条件の「内規」を一部改定し、ジャーナリズム学科などを持つ大学の広報関係者を受け入れることができるようにした。

出席 佐藤、瀬戸、守屋、伊藤、田中、山本の各委員。

2005年度日本クラブ賞推薦委員会

(2・28 大会議室)

委員長に細野氏を互選した後、細野氏の進行で8候補について審議。意見を付して4月7日の選考委員会に報告することにした。

出席 細野委員長、相田、佐藤、播谷、吉村、渡辺の各委員。

リレーエッセー

オウム・サリン事件①

元旦紙面で特報するべきか、あるいは待つべきか。1994年暮れ、私はギリギリまで迷っていた。山梨県上九一色村のオウム真理教施設でサリン残留物が検出された、という事実は1カ月以上も前から確認していた。しかし今、紙面にすることが正しい選択なのか。教団が暴発する可能性は。決定的な捜査妨害にならないか。葛藤が続いていた。

元旦号—10年前の決断

三沢 明彦

サリン残留物が検出されたのは11月のことだ。水面下の取材を進める中、12月初め、私は初めて現地を訪れた。高原にそびえる奇妙な建物の周囲に立つ男女からは、敵意のこもった視線が飛んできた。その建物がサリン製造工場「第7サティアン」

さらには、教団の動きを止めることができるかもしれない。と。そして、デスクのひと言が決断を促した。「元旦の1面トップはその年を象徴する」。来年の最大の敵こそ教団であることは間違いない。そのひと言で迷いが吹っ切れた。大み

そか、最後の夜回りを終えた時、除夜の鐘が遠くに響いていたのを覚えていた。

あれから10年の歳月が過ぎた。決断が正しかったかどうか、実は今も答えは出ていない。教団は報道を見てサリンを廃棄したという。第7サティアンも閉鎖された。しかし、地下鉄サリン事件で多くの命を失ったのも事実である。歴史に「もしも」はない。が、仮にあの時、記事にするのを見合わせていたら。そんな苦い思いも残っている。

(読売新聞北海道支社編集部長)  
\*3月20日—地下鉄サリン事件から10年になります。今号からオウム真理教・サリン事件の取材でパトンをつないでいただきます。



その年の6月、松本サリン事件が起き、第一通報者に対するいわれのない疑

## ハワード・ベーカー駐日米国大使 お別れ昼食会の質疑応答（全文）

2004年  
12. 14(火)

■春名幹男企画委員（代表質問 共同） 過去3年半の大使としての在任中、最も誇りに思われたことは何ですか。逆に、最も残念だと思われたことは何でしょうか。

質問の半分だけ答えたいような気分ですけれども、私が心から一番大切に思っていることは、アメリカ大使としての滞在中で少なくともそう思え、それが真実であると考えますが、日米間の友情と関係が3年半前よりよくなったということです。そういうことであれば、小さい貢献ではありませんけれども、私のこの滞在といったものは成功だったといえるのではないのでしょうか。

失望したことですけれども、それは、例えばBSE（牛海綿状脳症）の問題が解決していないこととか、いろいろ考えられると思うんです。私が失敗したと思ったことでも、結果的に成功したということもありました。

例えば、私が着任した早い時期でしたが、ワシントンから電信が雪崩のようにやってきました。「日本が不良債権の問題を解決するように強く主張しなければいけない」。そのような電信が10通ぐらい来ましてから、「日本は問題を処理します。日本は自分のやり方で、自分のスケジュールで対応します」と打電したわけです。日本は、実際にそのようなことになったわけですから、不良債

権は日本が独自で考え解決した問題となったわけです。

■春名 それでは、同盟国として、日本に対するアドバイスとか苦言などがございましたら、おっしゃってください。

私はもともと楽観主義者なんです。うまくいっていることについては覚えておきまして、うまくいかなかったことは忘れるたちです。日米間の関係において、いい結果に至っていないものもいくらかはあったかと思えます。

しかしこの3年半ですけれども、お互いの国をより深く理解することが進み、友情関係、同盟国としての関係は深くなってきたと思います。ですから、どうすれば同盟国としてうまくいくか、これははっきりしていると思えますけれども、なぜここまで親しくなることができたか。その説明は難しいと思います。

ただ、本当に友情関係は深くなりました。おそらく世界の2大国で友好関係をここまで築くということは珍しいと思います。なぜここまでの友好関係ができたのかは、いつまでたっても説明できないかもしれません。しかし、この事実を、日米双方とも誇りに思っているべきだと思います。

■春名 次はイラクの問題です。日本政府は自衛隊のイラク駐留の継続を決めました。世論の支持は不十分です。その理由のひとつは、多くの日本国民が、イラクではたくさん女性の子どもたちが巻き添えで殺されている。アメリカ軍によって理不尽な行動が行われていると信じているからです。そういった心配をする多くの日本国民に対して、どのように説得されるのでしょうか。

### 小泉首相のリーダーシップに敬意

女性や子どもに対する虐殺が行われているということですけれども、それはないと思えます。実際、イラクの国民というものは、独裁者の残酷な仕打ちに何年も遭ってきたわけです。それが続いているということもあるのです。反政府のやっているひどいことを考えると、そうではないかと思えます。

アメリカ軍は非常に注意深く、人道的に、そして寛容な形で行動しております。もちろん、事故というのは起こるわけです。しかしながら、アメリカ軍が女性や子どもを差別なく殺しているという、質問の前提には同意しません。それはアメリカの目的ではないし、アメリカの性格にも合っておりません。

しかしながら、確かにイラクではテロが起きていますというのも事実であります。イラクの外からもそういった人たちが入ってきて、平和と治安が回復しないことを目的として行動しているということがあります。彼らの好戦的な態度といったものは、イラク国民にとって非常に大きな悲劇に

なっています。けれども、イラクの民主的な制度が確立されたとき、そういったことは終わるでしょう。

この非常に不運な紛争というものは、過去のほかの戦争と同じように、後から振り返ってみればよいことではないが必要であったと位置づけられることになると思います。

私は、政府の高官が世論が反対しているにもかかわらず、決断することをリーダーシップの証と考えます。これは確かにリスクはあるんですけども、勇気のある、有能なリーダーシップの証であり、大政治家にふさわしい能力とさえいえるかもしれません。

確かに、世論が常に小泉政権の外交政策を支持しているわけはありませんけれども、小泉首相は頑張られました。そして、正しい行動をとられたと思います。挑戦を受けてたつた勇気のある首相として、歴史に残ると私は思います。

■春名 次は、日中米関係についての質問です。日中関係は、「政冷経熱」といわれています。アメリカは伝統的に、日中がそれほど過度に接近するのを嫌う傾向があります。その点では、東アジア共同体という構想も出ているわけですけども、このような現状は、アメリカにとって都合がいいのか、悪いのか、大使はどうお考えでしょうか。

### 日中米関係と東アジア共同体

その質問の前提には、同意しません。一瞬たりとも、アメリカが日中米間の良好な関係を

望ましいと思わないということはありません。米国の政策はこれまで、長年の間ですけれども、日本が中国のどちらか寄りということはありません。外交的なイニシアチブ、あるいは慎重な理解や協力を望むというスタンスを一貫してとっており、その政策は変わっていません。

最近の動きでは、米政府は、台湾の政府施設の名称変更提案に反対しました。これは中立的なバランスを維持することを示していると思います。

おそらく最も深刻で、現在の厳しい課題といえるのは、どのようにして日中両国が平和的な協力関係を築くことができるのか、だと思います。日中ともに大国です。日中ともに豊かな国です。防衛、軍事力も相当にあります。同時に両国ともアジア太平洋地域における平和の礎でもあります。

アメリカ政府の目的並びに政策として、日中米の間での友好関係を深めたいと考えています。これは六者協議の枠組みからも明らかだと思います。

そういう意味で、アメリカが中国の台頭、あるいは日本の台頭をおそれているかのような前提での質問はしないほうがよいでしょう。事実、アメリカはそれをおそれていないわけです。そもそも自信のある国だからです。もちろん、米国は、日本が民主国家であることを理解しております。アメリカのそれはなく、日本としての外交政策をお考えになり、対応していければと思います。

大事なことは、これは私の考えですけども、日本が中国との関係を将来どのようにもっていきたいかということです。難しい問題ではありますが、よく考えて対応を決めることが必要です。

■春名 東アジア共同体という考え方が最近になって大分盛り上がりつつありました。この構想については、どうお考えでしょうか。

質問の中には、答えるべき質問、答えようと思えば答えていい質問、答えてはならない質問があると昔から学んでおります。そして、いまのご質問は、最後のカテゴリーに入るものだと考えます。

■春名 台湾で立法院の選挙が行われましたが、その結果についてはどう受けとめられているのでしょうか。

アメリカは、内政に對しましては、台湾にも日本にも同じような態度をとっております。すなわち、アメリカは、ああしろ、こうしろということはいわれないということです。選挙に関しても何も申しませんでした。

しかしながら、選挙結果が、中国にチャレンジするような結果ではなかったということ、例えば、台湾の政府施設の名称変更問題でも、いい方に傾いたということ、中台間の緊張を多少減少させたかなと考えております。もしそうであれば、台中関係ばかりでなく、日本とアメリカにとってもよいことではないかと私は思います。

■春名 次は国連改革に関する質問ですけれども、日本が安保理の常任理事国になった場合、拒否権を与えるべきかどうか、どうお考えでしょうか。もうひとつは常任理事国を拡大するとして、



ベーカー大使お気に入りの1枚—離日前に開催した写真展の案内状もこの写真だった(釧路で撮影)

日本、ドイツ、インド、ブラジルの4カ国が入ることについてどう思われるでしょうか。

### 拒否権付きの常任理事国入りを支持

コフィー・アナン事務総長が任命した、ハイレベル委員会による改革の提案作業を高く評価します。改革を論じる時期であり、ハイレベル委員会は十分な力を持ち、いい提言が出てきたと思います。そのひとつは常任理事国の拡大です。では、何カ国増やせばいいか。それは申しあげることではできません。しかし、ご承知だと思います

けれども、これまで米国は一貫して、日本は常任理事国のメンバーであるべきだと述べてきました。その政策を堅持しております。

それでは、日本の拒否権ですけれども、もし安全保障理事会のメンバーになるのであれば、拒否権は持つべきです。付随するすべての権利を持つべきであり、同時にすべての責任も負うべきだと思います。ですから、答えはイエスということになります。拒否権は持つべきだと思います。

常任理事国といっても、2つの違うクラスを、つまり拒否権のあるグループとないグループを設けるのであれば、それは目的にかなうことができないうことになりません。日本が選ばれるということであれば、それは完全な一員となるべきであって、部分的な権利だけ与えられるというものではないかと思えます。

とはいいいながら、これがどうなるのか、何カ国にするべきなのか、私にもみえておりません。責任に関しましては、常任理事国のメンバーになった場合には、平和維持の責任を持つだけではありません。それ以外の責任も当然負わなければいけません。日本が常任理事国になりたいという動きを続けるのであれば、こうしたことも考慮しなければいけません。なった場合の日本の国内的影響や、軍事的に世界の紛争に関与する用意があるのかもよく考えなければいけません。

とは申しましたけれども、日本は、常任理事国入りへの強いコミットをしていますし、アメリカがそれを支持していることもはっきりしています。

■春名 最後は写真についてです。大使が写真を

撮られてきたというのは、共同通信で行われている写真展をみていただいたらわかるのですが、カメラのファインダーからみられた日本の自然というのはいかがだったでしょうか。また、ファインダーからのぞいた日本の庶民についての感想をお話しいただけたらと思います。

私の考えでは、写真家というのは違った見方で世界をみると思っています。ファインダーを通すと、世界は四角で切られ、そこだけでしか存在しないわけです。目でみるような包括的な世界ではありません。

ですからプロであれば、あるいはアマチュアであれば、写真家というのは世界の見方というのが違うと思うのです。

写真の対象はいろいろあると思います。私はすべてためしました。人、動物、風景を撮りました。1年間、窓やドアだけ撮っていたこともありました。窓やドアというのは、建物の目だと私は思うのです。

日本で非常に興味を持ったのは、そのすばらしい風景を撮るといふばかりでなく、むしろ小さなものも撮りたかったのです。そういったものが国民や文化というものをよくあらわしていると思うのです。

最近、皇居の古い木の門ですけれども、撮らせていただきました。それから、神社での古物市の売り物の写真を撮りました。とつてもうまじくいったものもあるんですよ。さびたカギとか、捨てられた写真などともうまじく撮りました。

そういうものは写真家だけが目にとまるもの

だと思えます。私は写真家として芸術的な才能があるとは思っていませんけれども、写真を撮るということにはふたつの役目があると思います。

ひとつは、私と私の回りの人生の日記になっているということ。もうひとつは、創造力というものがあまりないんですけれど、それをあらゆる手段になっっているわけです。

■**蕪沢嘉雄**（日経出身） アメリカは、財政と經常収支のいわゆる双子の赤字を抱えているわけですが、これは一体どうなるのでしょうか。

先ほど大使は、日本は日本なりのやり方で解決するということをお話をされましたけれども、アメリカはアメリカなりのどういうやり方で、この大きな問題を解決しようとしているのでしょうか。

■**まずいいたいことがあります。貿易収支あるいは財政収支あるいは為替は直接皆さんの口座あるいは財布のお金とは直結していません。**

国の経済活力をみるとときには、経済状況をみなければいけません。そういう観点から、アメリカ経済はいま活力があり、規模も大きく成功しています。世界トップの経済大国であり、日本は世界第2位というのはご承知の通りです。アメリカ経済はいま、とても健全だと私は確信しています。

正直いいまして、国際収支、貿易収支の赤字は一時的だと思っております。大事ではないとはいいませんけれども、コントロールされていないというのとは違うと思います。経済が健全であれば、富をつくり出す力が維持されれば、その国の経済の見通しは明るいいと思います。

■**長谷川洋三**（日経） 温暖化現象につきましては京都議定書ができて、日本も欧州もロシアも批准と足並みがそろってきました。肝心のアメリカがまだに態度をはっきりさせないというか、参加しないということと理解しているんですが、次の大使の時代でもそういう態度が続くのでしょうか。

### 米国に罰を与える「京都議定書」

■**将来の京都議定書への政策について、私は何かをいうことはできません。しかしながら、政府あるいは専門家の間では、京都議定書の要求は、アメリカに対して非常に無理な形でされていると認識されているわけです。**

ロシアは広大な森林を持っていますから、これがCO2の吸込み装置として機能するということです。煙突から出るCO2の排出レベルを下げる必要はないのです。林産品から十分なクレジットを得られるわけです。

EUの場合も、減らすべき排出量は多くはありません。制御できる高度な技術力を持ち、重大な問題にはならないでしょう。

時間がたてば、京都議定書の要求も適切になるかもしれません。現時点では、必要以上にアメリカに罰を与えるものであるとして、ブッシュ政権は批准しないことにしたわけです。

個人的な話ですけれども、私がアメリカの上院におりましたときには、水質改善と大気正常化に関する法案、これは1970年でしたけれども、その共同提案者として活動いたしました。ですから、環境のことはよくわかっているつもりであ

ります。

アメリカ、そして世界にとりまして、一番よいチャンスというのには、京都議定書を改定し平等化する。各国に付与されている条件を均一化する。とがよいのではないかと考えます。ブッシュ次期政権の間に京都議定書を批准するかどうかという質問でしたら、私の考えは、今のままであればそういうことはないだろうというふうに申しあげたいと思います。

■**鈴木悟**（テレビ朝日） 2001年の6月、ワシントンで大使任命が決まりました、そのときには300人を超える来賓の前で就任式があったことを覚えております。取材して書いたんですけども、ペーカー大使の決定については、「米国の伝統にのっとって」との発言がありました。政治的な大物—これは大統領がそのとおりの言い方をされたんですけども—そういう人を選ぶ、と。

これまでの大使の方々が去る以上に寂しくなると思います。なぜかといいますと、この伝統が変わる可能性があります。大統領の元のビジネスパートナーである友人が新たな在日大使に決まりました。ペーカー大使は3年半、日本に尽くしてくださいましたけれども、大物大使を日本に就任させることのプラス、マイナスについてはいかがでしょうか。

■**私自身もあの日をよく覚えております。すばらしいセレモニーでした。ホワイトハウスのイーストルームで大統領とともに就任式に臨みました。**

## 会員インタビュー



## 三田 敏雄 さん

(中部電力取締役東京支社長)

あそこで立っていたとき、実は私にそういう依頼が来ることを意外に思ったんですけれども、その後わかりました。私がオーケーしてしまったことがより大きな驚きでした。しかし、お受けしたことは大変よかったです。妻も私も

京都議定書が発効した。日本は2012年までに1990年比で6%の温室効果ガスの削減が求められているが、先進国の場合、途上国で実施するプロジェクトを通じて削減した分の温室効果ガスを自国の削減量として数えられるようにする制度（クリーン開発メカニズム＝CDM）がある。

中部電力がタイで開発しているもみ殻発電事業に対し、2004年度分として1億4000万円の補助金が政府から出されることになった。これは政府が削減量確保のためにCDMを活用して民間から買い取る初のケースとなる。中

部電力の三田敏雄・東京支社長に話を聞いた。

\* 「もみ殻発電は初め

すばらしい3年半を過ごしました。シーファーさんはいま豪州大使ですけれども、どのようにお働きになるか、それはご自身でお決めになることですから、私がいうことではないと思います。

「タイでは一般的でこれまでに6プラントあると聞いています。当社が開発するこの発電所が運転を開始すると、年間約8・4万トンの二酸化炭素排出削減量が発生する見込みです」「出力2万キロワットとされていますね」「日本の場合だと一般家庭のほぼ7000軒分の電力をまかなう量です」

中電が手がけているもみ殻発電所は、今年12月には運転が開始される。日本もタイに劣らぬ米の生産国だともみ殻発電というのは聞いたことがない。三田支社長によると「日本の場合、もみ殻はあってもこれを集めて運搬するのにコストがかかりすぎる」のだそうだ。

三田さんは名古屋生まれの名古屋育ち。趣味は？と聞くと「あえて言えばゴルフ、かな」と、あっさりした答え。そこで「地球温暖化防止のために個人レベルでできることは？」と素朴な質問をすると「テレビ、パソコン、ステレオなどをこまめに消すこと。小さいことだが、とにかくやることです」と、入社以来ほとんど火力発電の分野で仕事をしてきたエンジニアらしい熱くて率直な答えが返ってきた。

(春海)

しかし、私が来たことによって、もし何か貢献ができたとすればそれは政策立案に関しまして、大統領、副大統領、大統領補佐官、国務長官、国務副長官、エネルギー長官らと私が近い関係にあったということを活用できたことだと思います。何年間もおつき合いがあった方たちだったので。

シーファーさんもそういうつながりがないわけではありません。確かに、元ビジネスパートナーであり、大統領の個人的な友人ではあるかもしれませんが、重要な意味があると思います。シーファーさんも大統領と、私と同じようにやりとりが当然できると思います。それはすばらしい資産だと思います。シーファー大使は、議員としての背景はないかもしれませんが、ほかの方面での経験が十分にあります。能力や洞察力もお持ちで、それを生かしてくれると思います。

大使としてもすばらしい仕事をしてくれることは間違いのないと思います。

■岡元隆治理事（司会・TBS） それでは、時間となりました。本日にすばらしいスピーチ、それから、我々の質問にも一つ一つ丁寧にお答えいただきました。

それとあわせて、在任中に当クラブに対して、さまざまなご協力をいただいたことについても感謝を申しあげたいと思います。クラブを代表して、記念品を贈らせていただきます。（拍手）

（通訳・ヤマモトヨウコ 大野理恵 文責・編集部）

※ベーカー大使は2月17日に帰任しました。



◇日本一広い市◇

# 移動編集局から 方言での提言記事も

▶沢野 都  
(岐阜新聞飛騨総局)

国内有数の観光地、岐阜県高山市が2月1日、近隣9町村と編入合併し、新・高山市が誕生した。面積は2、179平方メートルで東京都に匹敵。北海道足寄町を抜き、日本一広い市になった。3、000メートル級の北アルプス、露天風呂の数が日本一多い奥飛騨温泉郷といった自然資源を手に入れ、観光地としての魅力もパワーアップ。広大な地域づくりをどう進めるのか注目を集める。

岐阜はさておき、飛騨高山や春と秋の高山祭といえば、全国的に知名度は高い。高山市は山々に囲まれた飛騨地方の中心地。合併前の市の観光客数は年間約300万人。江戸時代の商家の雰囲気を残す古い町並みに、飛騨の匠（たくみ）が技の粋をつぎ込んだ豪華な祭り屋台が、ギシギシ音を立てて通る風情は、毎年マスコミ各社によって報道されてきた。遅い春に早い冬。桜の開花や初雪など季節の話もこと欠かない。



大雪が降るなか、新・高山市誕生を祝う人々＝岐阜県高山市

市は9町村の枠組みごとに、支所を設置した。9町村のうち、6町村は国から過疎の指定を受けた山村地域。女工哀史で知られる野麦峠も高山市になった。野麦から高山市役所へは、山道で峠越えし、1車両しか通れない真つ暗なトンネルを抜けて

2時間以上もかかる。雪かきの量、寒さ、病院までの距離など、地域事情や生活環境が、市民同士なのに大きく異なる。市民としての一体感をどう持たせるか関心が集まった。

そこで同市は、地域の個性や資源を生かすため、総額10億6500万円の「地域振興特別予算」枠を創設した。旧町村が独自に実施してきた観光イベントや姉妹都市交流事業などを対象に、合併後10年間をめどに継続するのが目的。合併算定替えて10年間保障される地方交付税の上乗せ分から工面した、全国に例のない試みだった。

人口などを考慮した配分比率で、高山地域と9つの支所へ分配される。各支所は、本庁で執行する予算には盛り込まれない分野への、きめ細かい支援を期待する。

地方紙として、新市誕生には移動編集局という初態勢で臨んだ。岐阜市の本社デスクが高山市へ短期間移動し、硬派、軟派連載などの記事を集中出稿。「コレ、知っとるけナ。高山市がきょうから合併してデコ（大きく）なったんやぞ」で始まる全文飛騨の方言でつづった提言記事

編入合併とは、9町村は各自自治体の歴史に幕を引くこと。各地の閉町村式では、ふるさとを失う住民が涙を流した。合併は財政上やむを得ない決断だったことや、対等互譲の精神とは言いながら、編入する現実を涙で思い知らされた。高山市と9町村、双方の住民の気持ちに立った報道を今後も続けたい。

(さわの・みやこ)

**新・高山市 一口メモ**

人口 9万7533人  
 総世帯数 3万3937世帯  
 面積 2179平方キロメートル  
 森林率 92.5% (2月1日現在)

今年2月1日、近隣9町村を編入合併した高山市は、岐阜県の北部「飛騨地方」に位置し、長野、富山、石川、福井の県境に接する。槍ヶ岳や乗鞍岳という3000メートル級の山岳を有し、奥飛騨温泉郷や乗鞍スカイラインなどの観光地を新たに抱えた。高級肉「飛騨牛」や高冷地野菜などの農畜産業、いすやテーブルなどの家具生産も盛ん。味や質の良さが「飛騨ブランド」として国内で定着している。交通手段は東京から鉄道なら4時間半、高速バスなら5時間かかる。

## 情報発信

## ■キャプテン・マイケル・ハッチャー記者会見

## 長崎、沖縄沖で沈没船引き上げ

世界的に有名なトレジャーハンターのマイケル・ハッチャー氏が日本近海で沈没船の引き上げを行うことを発表した。歴史的文献などから、長崎沖に3隻のオランダ船が、沖縄近海に1隻のポルトガル船の沈没が予想されている。6月以降に本格的な引き上げ作業に入る予定。水中考古学という分野で、ハッチャー氏は会見で「我々は略奪者ではない。歴史を保存し記録するのが目的である」と語った。(1.31 宴会場)

照会先：ハッチャー記者会見実行委員会（テレビ朝日映像）Tel：03-3587-8150

## ■ホワイトベア・スポーツ賞表彰式 アテネ五輪のメダリストたち



アマチュアスポーツ界で功績のあった選手や指導者に贈られる「第44回ホワイトベア・スポーツ賞」（デイリースポーツ社制定）の表彰式

が行われた。今年の実賞者はアテネ五輪のメダリストの中からマラソンの野口みずき選手、柔道の野村忠宏選手、水泳の柴田重衣選手（写真左から＝デイリースポーツ社提供）と男子体操チームが選ばれ、アーチェリーの山本博選手と水泳シンクロの井村雅代ヘッドコーチに特別賞が贈られた。パーティー会場にはアテネ五輪での活躍を報じたデイリースポーツ紙の紙面と写真パネルも飾られた。(2.4 大会議室・宴会場)

## 新しいOB会員

## ■ローカル・マニフェスト結成大会

地方から日本の政治を変えようという「ローカル・マニフェスト推進首長連盟」が発足した。連盟には全国の首長有志（知事18人、市区長110人、町村長57人）が参加、「マニフェスト型政治」の実現を目指す。この日の結成大会には65人の首長が出席。あわせて学識経験者や自治体職員、NPO関係者らが参加する「ローカル・マニフェスト推進ネットワーク」（代表・北川正恭早大大学院教授）も結成され、双方が連携しながら運動を進めていく。当面の目標は公選法の改正。首長選挙では規制されている街頭でのマニフェスト配布ができるよう呼びかけていく。(2.4 10階ホール)

照会先：早稲田大学マニフェスト研究所Tel 5286-1663

## ■「いま、戦争と平和を考える」－日本ペンクラブ集会

日本ペンクラブ（井上ひさし会長）がシンポジウムを開催し、イラクからの自衛隊の早期撤退や、報道の自由を求める声明を発表した。パネリストは井上会長と作家の辻井喬さん、アジア経済研究所の酒井啓子さん。イラク戦争・ファルージャ攻撃を撮影したビデオも上映された。参加者は約470人。

照会先：日本ペンクラブ Tel 5614-5391

## お世話になりました、後任をよろしく

トルコ大使館と欧州（EU）委員会代表部の特別賛助会員が2月に帰国しました。ともに広報部長を務め、滞日年数も5年。また、ともにすらっとした長軀で（180センチ以上）、ちょっとシャイな笑顔が魅力的なお二人でした。仕事やプライベートでの思い出などを事務局の石川が聞きました。

## ▼シナン・キュルンさん（トルコ大使館）

なんといっても2003年2月から1年以上にわたって開催した「日本におけるトルコ年」がハイライトです。トルコ文明や料理を紹介した催しが特に好評でしたが、残念ながら日本からの観光客増大とはなりません。イラク戦争とイスタンブールでの連続テロ事件が主な原因だと思います。マイナス・イメージを払拭するには時間がかかるでしょうが、中近東情勢が少し落ち着き、日本の景気も回復傾向にあるので、3年前の年間9万5千人のレベルに早くもどることを期待しています。

プライベートでは、好きなピンポンやサッカーで多くの友人ができました。特にピンポンは江東区の自宅近くの体育館で週3回、仕事の後、汗をながしました。そこでの交流が日本語の上達につながりました。アンカラから後任が来るまでは、一等参事官のカラジャさんが仕事を引き継ぎます。私は古巣の首相府の報道・出版・情報総局にもどります。

## ▼エティエンヌ・ロイターさん（EU代表部）

日欧記者の意見交換の場として定着してきている「日本・EUジャーナリスト会議」を京都と福岡で開催したことが一番の思い出です。今年も4月中旬、愛知万博の会場となる名古屋で、アジアの記者も招き環境問題をテーマに行う予定です。

2002年、03年は日本政府との「規制改革」の交渉で、在日外国特派員の取材上のアクセス改善を議題に盛り込みました。これは小泉初訪朝の際、在京欧州特派員が排除されたことが直接の動機でした。ただし昨年の交渉ではこの問題を取りあげませんでした。昨年3月に外国記者証を持っている外国特派員が会見に出席できるよう日本新聞協会から公的な出先クラブに協力依頼が出て、事態が改善されたと判断したからです。

赴任中、各地のEU協会訪問のため20県以上へ出張しました。その土地の地酒が気に入りました。辛口の冷酒ならなんでもOKです。後任は4月にブリュッセル本部から来ます。チャーミングな女性ときいています。

## クラブレストラン

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

和食も洋食も春をイメージしてカラフルでボリューム豊かなコースを用意しました。



## 花見懐石5250円 4月1日まで

先付：蛤みぞれ和え 椀：清汁仕立て（甘鯛市松、白魚、天豆） 生もの：蛤金箔盛り（鮪、みる貝他） 焼物：鱈洋菜焼き（バイ貝、芽キャベツ、わらびいか他） 煮物：桜花大根道明寺いこみ（飯蛸） 揚物：竹の子はさみ揚げ（蟹花衣揚げ、桜麩） 食事：五目御飯 水菓子：桜アイス、メロン他 これにグラス冷酒



## 春爛漫コース6000円 4月28日まで

フレッシュフォアグラのポワレと野菜のピラフ添え 桜エビのカッペリーニ 地蛤のアラスカ伝統コンソメスープ オマール海老のオランダズグラタン仕立て 牛フィレ肉のステーキ春野菜添え 土佐香美産フルーツトマトのコンポート・バニラアイス添え これにグラスワインとコーヒーまたは紅茶

## 個室での歓送迎会プランをご利用ください

春の異動の季節にあわせた宴会プランを用意しました（3月14日～4月28日）。社内の歓送迎会だけでなく、プライベートな集まりにもご利用ください。お一人3500円と5000円（税込み）の2種類です。メニューは冷たい料理5～8種類に温かい料理5～6種類、それにそばとにぎり寿司がつかます。飲物、部屋代は別料金です。いずれも1500円をプラスしてフリードリンクにすることもできます。10人からお受けしますので、お早めにご予約ください。



## 3月はソング・オブ・アクアマリン

3月の誕生石はアクアマリンです。ストーンメッセージは「聡明」。航海の安全を約束する船乗りのお守りとされています。ホワイトラム、ブルーキュランなどをミックスしました。さて、どんな「吉富マジック」のカクテルでしょうか。夕方のバーカウンターでおたのしみください。



## クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	クラブ行事への申し込み
3503-2723	3503-2722
洋食レストラン (10階)	会員事務
3503-2766	3503-2725
貸室予約、宴会打ち合わせ	経 理
3503-2724	3503-2728
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp

## 会報委員会

委員長=住田良能

委員=永井多恵子 中園龍二 橋場義之  
福沢亜夫 布施優子 仙石伸也連絡=長谷川和子 本庄五月  
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

## 福田康夫氏から寄贈書

福田康夫前官房長官から『回顧九十年 福田越夫』と『普遍的な倫理基準の探求・福田越夫とOBサミット』を寄贈していただきました。福田元首相は明治38年、つまり1905年の生まれで、健在なら今年1月で100歳でした。福田議員の手紙には「長年ご厚誼をたまわったマスコミ関係者の方々が多数在籍しておられる貴クラブに、父が残した書籍を置いていただき、往時を思い出すすがにしていたいただければ幸いです」と。ラウンジの書棚にあります。貸し出し希望の方は受付まで。

## 会員登録の変更は所定用紙で

会員の入会、退会、区分変更には所定の「変更届」があります。異動がありましたら、事務局の会員事務担当の斎藤（3503-2725）までご連絡ください。登録の変更は会員資格委員会におはかりします。

## &lt;訃報&gt;

西岡将会員（中日新聞出身、75歳）が2月10日、くも膜下出血のため死去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

<会員現況> 法人会員 147社 基本会員 809人 個人会員 1,661人 法人・個人賛助会員 76社 189人 特別賛助会員 68人 名誉・功労会員 10人  
計 223社 2,737人

## 今後の行事予定 (3/4現在)

- 3.16 (水) 15:00～16:30 (10階ホール)  
研究会「知財戦略」  
加藤幹之・富士通法務・知財権本部長
- 3.17 (木) 14:00～15:30 (宴会場)  
植木安弘・国連アチエ広報官記者会見ーインドネシア・アチエの津波被害支援活動報告
- 3.22 (火) 12:00～13:30 (10階ホール)  
麻生渡・全国知事会長昼食会
- 3.23 (水) 15:00～16:30 (10階ホール)  
シリーズ研究会「中東ペーシック③ イラン」  
佐藤秀信・元外務省専門調査員
- 3.25 (金) 14:00～15:30 (10階ホール)  
「著者と語る」⑨ 緒方四十郎氏  
「遙かなる昭和 父・緒方竹虎と私」
- 3.26 (土) 13:00～14:40 (10階ホール)  
試写会「リトル パーズ イラク 戦火の家族たち」
- 4.6 (水) 12:00～14:00 (10階ホール)  
鈴木敏文セブンイレブン会長昼食会  
15:00～16:30 (10階ホール)  
研究会「東アジア共同体」②  
シアゾン駐日フィリピン大使
- 4.18 (月) 15:00～16:30 (10階ホール)  
シリーズ研究会「中東ペーシック④ アラブの政治思想」  
池内恵国際日本文化研究センター助教授

行事案内専用電話 3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテーブルでお知らせしています。

撮影 尾崎 有希 (スポーツニッポン  
新聞社写真部)



埼玉スタジアム=2.9

## サッカー陶然

サッカー・ワールドカップ(W杯)アジア最終予選の「日本対北朝鮮」終了後、スクリーンで大写しになる日本側サポーターの大喜びの姿を見てがっくりする北朝鮮サポーターたち。水平にほぼ3等分した画面上部の「やったーっ」と絶叫する日本の女性サポーターのシャツの青。それを見上げて「あーあ」とため息をつく北朝鮮側の赤いジャケット。青と赤の色の対比を下段の横断幕の白が引き締めている。

がっくりはしているけれど、北朝鮮側の若者たちの表情に怒りや憎しみはなく、むしろさわやかな感じである。そこがいい。時局柄、とりわけこの試合はもつとげとげしい雰囲気になったとしてもそれなりの説明はついたはず。だが、選手も観客も純粹にゲームをゲームとして戦い、応援した。試合の後味がよかったのは、双方のフェアな応援ぶりと素晴らしい選手たちのおかげだ。とりわけ北朝鮮チームの安英学と李漢宰の在日2選手の態度には感銘を受けた。テレビインタビューに答える態度とその言葉の立派さに何だか北朝鮮観に幅が出たような気さえする。サッカーW杯共催を通して思いがけない日韓の新鮮な民間交流が始まったが、その波が北にまで及ぶ日はいつか来るだろうか。…と、つい時局問題を忘れそうなほど、私は若い力に一瞬の夢を見ってしまった。

(松本侑壬子)